



①4歳の坊や、お絵描き作品の出来ばえに満足そう

<http://www.hospitalasobivol.jp>

# ゆき@ 遊びのボランティア ガラガラドンです(\*^ ^\*)

大熊 由紀子

ある日東京に生まれ、01年までの17年間、朝日新聞の福祉、医療、科学、技術分野の社説を担当。著書に『物語・介護保険』（岩波書店）『恋するようにボランティアを〜優しき挑戦者たち』『寝たきり老人のいる国はない国』『福祉が変わる医療が変わる』（ぶどう社）『患者の声を医療に生かす』（医学書院）など。国際医療福祉大学大学院教授（医療福祉ジャーナリズム）。福祉と医療、現場と政策をつなぐ「えにし」ネット志の縁結び係 & 小間使い。http://www.yuki-enishi.com/ の「優しき挑戦者の部屋」などでバックナンバーが読めます。

第98回

遊びのボランティア・ガラガラドンが20周年を迎えました。小児病棟の子どもたちは治療のつらさ、家族と離れている淋しさに耐えています。その子たちが写真①のように輝けるように、笑えるように、大好きな遊びで支えてきたボランティアです。

20年も続いたわけ、そして、この運動が各地に飛び火している理由を探っていたら「ボランティアは伝染する」というおゆきの第4法則にぴたりだったので、嬉しくなっていました。この連載を『恋するようにボランティアを〜優しき挑戦者たち』にまとめている時「発見」したのが、この法則です。

伝染力は2つの要素に左右されます。

その1・ボランティアウイルスは、ワクワクする、楽しいところで繁殖し、ジメジメ湿っぽいところでは死滅してしまう。

その2・絶妙なワザでウイルス感染を仕掛ける人物がいるかどうか。

## ◆遊びの絶大な威力に目覚めて◆

ガラガラドンは、上の写真のように楽しい雰囲気になっています。そのカナメにいるのが坂上和子さんです。恋と同じように坂上さんとボランティアの出会いも偶然でした。悪性リンパ腫で入院中の病児を抱えカップラーメンしか食べていない友人にお弁当を届けたとき、フト思いついて息子の絵本を持参し一緒に遊んでみたところ、お

弁当以上に母子に喜ばれ、遊びの絶大な効果に目覚めたのです。

入院中の子どもたちは遊べる場も玩具も遊び相手もない。そばを離れると子どもが泣き叫ぶので家族は罪悪感にさいなまれる。なんとかしなければ！ やむにやまれぬ気持ちでこうして91年、作業療法士、ナース、保育士たち7人でガラガラドンを立ち上げました。病棟のクリスマス会で演じた人形劇（写真②）が大好評で、訪ねるたびに「ガラガラドンが来た」と子どもたちが歓声をあげたのが由来です。

## ◆ボランティアたちがやめないわけ◆

東京・新宿にある国際医療研究センターの小児科病棟を訪ねてみました。準備室でオレンジ色のエプロンとマスクをつけたボランティアたち（写真③）。坂上さんは、その一人一人と子どもとの相性を見極め、それぞれの子にあった玩具（写真④）を組み合わせてゆきます。玩具も遊びも状況によって臨機応変に変えていきます。保育士を天職と思っている坂上さんといえ、まるで神業です。

09年度の活動は遊んだ子の数のべ807人。土曜が49回、平日89回、お楽しみ行事8回。10人中7人が点滴台につながれているので、プレイルームと一緒に遊ぶときは管が絡まったり、台が転倒する危険にも気をくばらなければなりません。



⑥ホテルの家族ぐるみ無料招待、中央が遊びボランティア

⑤念願の拠点「ハウスグランマ」。一緒に病気を体験した子どもたちが夏休みの自由研究で油絵に挑戦



②20周年を記念してガラガラドンの人形劇を再演

⑦NPO仲間「ぶくぶくはるーん」が20周年の飾りつけで応援



③マスクにオレンジ色のエプロンのボランティアたち。中央が坂上和子さん



④様々な年齢に対応した玩具の数々



#### ◆応援団が次々と◆

ガラガラドンには、いま、まるで磁石に吸いよせられるように、さまざまな応援が寄せられるようになりました。

病院の近くのマンションに、昨年、「ハウス・グランマ」という拠点ができたのですが、これは月8万円の家賃を寄付してくれる人が現れたためです。会報の発送をしたり、退院した子どもたちや親が集つたりする憩いの場です（写真⑤）。

伊豆のホテル、アンダリゾート別邸一碧湖は、病気の子もただでなく家族ぐるみで無料招待しています。食べて、歌つて、遊んで（写真⑥）、病気を楽しく忘れる一

泊旅行。ホテル側はいいです。「お客の少ない時期に利用していただき、こんなに喜んでくださるなら、こちらも嬉しいです」

#### ◆寄付を吸いよせる秘密は◆

恋と同じように、坂上さんはボランティアの修羅場も経験しました。手のかかる子どもがいるのにボランティアのためにしばしば家をあける妻、一緒に遊んだ子の死に直面すると辛くて家事も手につかなくなる妻。夫の不満が募り、離婚。

穴があいて雨の日には水がもれる靴を履くという貧しさの中で、昼夜開講の明治学院大学に入学したのが転機でした。

「行政は、人は、優しさでは金を出しません。科学的調査がものをいいます」という講義に感動し、実行に移しました。

きめ細かな調査報告書。隔月の「いたいいたい」の飛んで行け通信』には、子どもたちの楽しい写真や手紙。富士ゼロックス東京のボランティアによる上質の紙への両面カラーコピーなので、受け取った人は惹きつけられます。そして、こまめな札状。寄付を吸いよせる秘密でした。

坂上さんは小学校2年生のとき母を自殺で失い、父は蒸発。カトリック系の児童養護施設に入居した日、「お待ちしていましたよ。安心してください」と抱きしめられました。坂上さんの温かさの源には、そのときの感動が流れているように思えます。